理系の人々

5757

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
理系の人々

【Ｎコード】
Ｎ３８７２ＢＡ

【作者名】
５７５７

【あらすじ】
工業高校機械科に通う三谷継（みたにけい）は、夏休み前の終業式の日に銃のようなもので撃たれる。
目を覚ますとそこは牢の中。
継はなんと異星にいた。

数学と物理しか勉強ができない高校生が奮闘するＳＦストーリー。

ちょっとタイトルに不満があります。

自分でつけといてなんだこれ…って思ってます。つーことでタイトル募集中（´・ω・）

第１話　夏の始まり（前書き）

初投稿です。うまく書けてるか分かりません。誤字脱字などがあれば教えて欲しいです。

第1話　夏の始まり

7月21日。

「お前ら夏休みでハシャぐのはいいけど、ちゃんとバレないようにしろよー？あと課題も一応やれよー？」担任の教師がこんなことを言っていた。

「それは教師としてどうかと思いまーす。」と女子生徒が笑いながら言う。

「細けぇ事は気にすんな！！お前ら夏を楽しめよ！じゃあ号令！」

「起立。さようなら」

「「「さようならー！！」」」

号令が終わると共に、教室内がガヤガヤし始める。この後の予定やら夏休みの計画やらでみんな楽しそうだ。

「継ー！！この後どこ行く？あ、悟はどこがいい？」

話しかけてきたのは友人の義人だった。継と言うのは俺、三谷継の事だ。俺、悟、義人は中学からの親友である。

悟は「どこでもいい」と言うと、帰る準備を始めた。

「あ、わりい。俺今日パス」と俺が返すと、義人は

「なん……だと……！？お前まさか予定があるってのか…！？ハッ！？彼女ができたのか！？そうなのか！？　くっそリア充め！！顔面滅びろ！！」なんてことを言ってきた。

「滅びろ」ボソッと悟も呟く。

「いやいやいや違うから！！やめろお前ら、祈祷を始めるんじゃねえ！！呪いでもかける気か！？」

こんなだからコイツらもてないんじゃ？？と正直思ってしまう。人のこと言えないけど。

「さっさと家に帰って部屋を片付けたいだけだって。夜中に飼い猫が紙を散らかしまくってたみたいでさ、朝見たらひでえ惨状だった。」と、事実を述べると、

「そうならそうと言えよ～。お前を拷問にかけるところだったじゃないか。」っておい。

「サラッと怖いこと言うんじゃねえよ…。」呆れつつ言った。

「そういうことならまた今度な。メールすっから！！じゃあなー！！」「またね」義人と悟が言う。

「おう。じゃあまたな。」と返し、教室を出た。

所変わって、建物が密集する通りに来ていた。
家に帰るにはここを通るのが最短ルートだが、アスファルトからの熱でうだるような暑さだった。
「暑……」
文句が自然と出た。涼みに店に入るにも、正直この汗の量で気が引ける。ということで、路地裏で涼むことにした。
こういう時、日陰は日なたよりも４、５℃気温が低い。逃げるように路地裏に滑り込んだ。
今まで入ったことのない、やたらに入り組んだ路だった。しばらく進むと、やたらと開けている１０メートル四方くらいの場所に出た。
その時。
上から叩きつけるような風が吹いた。

「っ！？」　思わず目を閉じる。

吹き下ろしてくる風の中、なんとか目を開ける。上をみるとそこには、なにか透明なものが浮かんでいた。

はっきりとは見えないが、粉塵や砂ぼこりでそこに「何か」があるというのは分かった。

風は立っていられないほどに強くなり、再び目を閉じる。

機械音と共に風が弱くなった。立ち上がり目を開けると、そこには信じられない物があった。

銀色の――――――円盤。

一般的に「ＵＦＯ」と呼ばれるようなそれが目の前の空間にあった。

プシュ、という音とと共に、円盤の側面が開いた。

宇宙人らしき人影がゆっくりと出てくる。

（うっお！？宇宙人襲来！？地球侵略！？人類滅亡！？）　継の頭の中をあらゆる不吉な考えが巡る。

おずおずと宇宙人らしき人影の顔を見て、継は思った。

（――――あ。…………かわいい……！！）

茶髪でショートカットの美少女がそこには居た。

少女が伸びをして、嬉しそうに呟いた。

「――――やった。………やっと着いたぁ……！！」

言葉を発すると同時に、腰の後ろ付近で何かが揺れる。

継はそれを見て思わず言った。

「…尻尾おおぉぉぉぉ！！！！？？？」

少女の尻尾は左右にゆっくりと動いていた。

声に驚いた少女が継の方を見る。

「あああぁぁぁぁあっ！！見つかっちゃった！！！？？」

叫ぶ少女が何かを取り出した。

（はっ！？なんだあれ、銃か！？）

銃のようなものを少女が両手で支え、継に向けている。

やめろ、と言う間もなく、継の身体は光に包まれ、意識を失った。

第1話　夏の始まり（後書き）

今後不定期気味に投稿していく予定です。

第2話　牢の中（前書き）

続きの投稿方法がいまいち分かりません……ｏｒｚ

第2話　牢の中

目を覚ますと、周りを柵で囲まれていた。

というか。

牢の中、だった。

「うあああぁぁぁぁっ！？」飛び起きながら叫んだ。

周りに人が居るらしく、ザワザワし始める。

…なんか…動物園の虎みたいな気分になってきた……。

ふと外に目をやり、集まる人々を見る。

…先ほどの少女と同様、皆さん尻尾が生えてらっしゃる…それと…
…耳も。

もう何がなんだか……意味が分からないよ！！

混乱しているところに低い声が響いた。

「…起きたか……地球人…。」

声がする方を見ると、威厳をオーラのごとく放つおじいさんがいる。

足元から腹…顔へと視線を移す…。

「ぶっふぉぁ！？」　思わず噴き出してしまった。

その理由は…彼の頭の上…。

――ウサ耳―――だった。

「…笑うな…！！」険のある声で怒鳴られる。

「す…すいません…。今のは…不意打ちすぎっ……！！」必死に笑いを堪えながら言う。

「…突然で悪いが、お前には死刑になってもらう。」

「……………………………は！！？」

何言ってんだろう、この人。

「え？え！？全然話が見えないんですけど！？ていうかまずここどこ！？なんで俺牢に入れられてんの！？死刑って何！？」軽いパニック状態で矢継ぎ早に質問する。

「…うるさい奴だ……まあいい。まずは一つ目の質問に答えてやろう。。」

一呼吸おいて、口を開く。

「ここは地球ではない。銀河系の惑星、アグライア。あ、ちなみに私はこの星の最高議長のネルだ。」

「え……地球じゃ…ないの……！？…じゃあ俺なんでここに居るの？」

「お前は…獣耳が無い少女に会ったか…？」

ハッとする。

「あ…はい…会いました。尻尾はありましたね」

はあ、とネルが溜め息をつく。

「その少女が原因だ。…恐らく、銃のような物で撃たれただろう？？」

「あ…はい、そうです。…でも…俺がここに居るのと何の関係が？」
疑問に思ったことを投げかける。

「…それは物質転送装置なのだ。あれだ、俗に言う《ワープ》のための道具だ。」

「ゑ！？ワープ！？」なんですか。某戦艦のあれですか。

「…動揺しておるな。まあいい、この辺で、死刑の話に戻るか。」

……あ……死刑……

第2話　牢の中（後書き）

死刑♪（ミサ風に）

第3話　牢からの脱出？（前書き）

脱出というか…出してくれます。

第3話　牢からの脱出？

「死刑てなんなんすか」
「死刑は死刑だ」
「で、なんで死刑なんです？理解できません。頭沸いてんですか。」
「説明すっから黙って聞けやガキが…」

正直かなり怖いです。やめてください。

「すんませんした。説明キボン。」

ネルが話し始める。「…昔からのきまりでな。この星の法律でもある。《この惑星に外部からの訪問者あれば、打ち払うべし。侵入を許せし時は、その者の命絶たるるべし。》という条文だ。ということで法律に基づいて死刑に「断る」

言葉を被せると、ネルは怪訝な表情を浮かべる。

「今回の出来事は全部そっち側に責任があるだろ!?勝手にワープなんてさせられて、困ってるのはこっちだっての。大体俺は訪問もしてないし、打ち払われても無い。それにあんたらは、あんたら以外をワープできないようにしとくべきだったはずだ。そうだろ？それにあれだよ、何だっけ…チガイホーケン？とかいうのにも当てはまるだろうし、死刑なんてまっぴらごめんだ」

言いたいことは言い切った。正直チガイホーケンってなんだっけ、と思いながらネルの返答を待つ。

「…確かに…そうだな。お前の言うことはもっともだ。だが、たとえ特例的にお前を生かしたとしてどうする気だ？？一生をここで過ごすだけだぞ？？」

疑問に思ったことを言ってみる。

「ワープの機械をもう一回使うのはダメなのか！？」

「物質転送装置は送信機と受信機が別々だ。ちなみに受信機は２０トンくらいあるぞ？」

即答される。

「宇宙船は無いのか！？あの女の子は乗ってたじゃないか。」

再び質問。

「生憎、人が乗るように作ってはいけない法律があってな、あれはあの子がこっそり作ったものだ」

また面倒な法律…。全然対外的じゃない…むしろ自分から交易だのを閉じているのだろうか。

「よし、分かった。」

このとき俺は決意した。

「俺が宇宙船を作る。それでいいだろう？」

辺りがざわつく。ネルも驚いた表情だった。

「……くくッ、はははははははははははははは！！！！！！！！！！！！！」

ネルが笑い出した。

「宇宙船を…！！くくく、作ると…！！ははは！！面白い！！」

なんかキャラおかしくないですかネルさーん。

ひとしきり笑った後、楽しそうな表情で言った。

「いいだろう！！作るがいい！！資金はこちらで出し、大学にも行かせよう！！……そうだ、まだ名を聞いてなかったな？名前は何というのだ？」

「三谷継。言っとくが本気だからな？絶対作ってやるよ！！」

「そうか。なんにせよ手続きを済ませねばなるまい。…三谷を牢か

ら出してやってくれ。」

（そうだった…格好良く啖呵切ったけど俺牢屋で捕まってる身じゃん…！！迫力ねえなおい…！！）なんて思いつつ、牢からやっと出る。

「こちらへ来なさい三谷継。…大学選びにあたって聞きたいのだが…お前は物理や数学はできる方か…？」

ああ、宇宙船作るにはそっち系大事だよな、と思いつつ答える。

「得意ですよ？どっちも模試で一位とつたこともありますから。……まあ、それ以外は全く勉強できないんですけど。」

この２つは誇れる、と思う。

「ほう、そうか！！ならばお前には技巧特化大学工学科が良いだろう」

聞き慣れない言葉が出てきた…。

「その、技巧特化大学…ってなんなんですか！？…あと…俺まだ高校生なんですが。」

「その辺りの説明は面倒くさいから省く。他の奴に聞け。」

え…こんな投げやりな…。担任と既視感を覚えた。

「あとは…住むところをどうするかだな…。」

ネルが思案していると、後ろの方から声が上がった。

「最高議長ネル様！！」

「その子は私どもの家で預かろうと思うのですが。…なにしろ、娘の失態ですので…。」

振り向くと、女性が立っていた。

「ミネルバ…だったか…？そうか。ではそうするがよい。」

なんか勝手に決まったらしいです。まあ、家事とかできないから一人暮らしは無理だったんだけど。

「そうと決まれば…行きましょうか！！…えーと…三谷くん…？」

女性…ミネルバさんとやらに話しかけられる。

「あ…はい。」

短い返事をしたところでミネルバさんがついてこいという風に歩き出す。

黙って後ろについて歩いていく俺。

ミネルバさん、……猫耳でした。

5分ほど歩いた後、ミネルバさんが立ち止まる。

「ここがあなたが一緒に暮らす家よ！！…どうかしら！？」

目を輝かせて聞いてくる。

「すごく…大きいです……。」

増築しまくった感じの家だったが、ほとんどそんな違和感はない、と思った。ペンキのいろが僅かに違うところがあり、それで辛うじて増築が分かる程度。

「でしょう！？ま、立ち話も何だし、中に入りましょう。」

嬉しそうに話し、玄関を開けて入っていくミネルバさん。その後について行く。

家に入って、思わず声を漏らした。

「…すっげぇ……」

アンティークらしい家具やステンドグラス何かがある。華やかであるが、華美ではないという感じの室内だった。こういう部屋は結構好きだ。

「あら～ありがとう。必死こいて何年もかけて集めた甲斐があったわ～。あ、とりあえず座って？」

椅子に座るように促され、座る。

「改めて自己紹介しますね。ミネルバ・クロト、ピチピチの４０歳で～す。」

ピチピチの…？４０歳……！？

「あ、はい。俺は三谷継、正真正銘ピチピチの１７歳です。」

「そんなにピチピチを強調しなくても良いと思うわよ？細かいこと気にしちゃモテないわよ~？だからまだ童貞なのよ」

「…っ!!…う、うるさい!!俺は３０歳で魔法使いになんかならないからな!!」

あわてて反論した。

「あ、この家には後2人住んでるから。あとで挨拶しときなさいね？」

鮮やかなスルー。

「じゃあ、この星について説明していこうと思うけど…また次話ね。」

「ゑ？？」

第3話　牢からの脱出？（後書き）

次話は設定紹介をミネルバさんがしてくれる感じになります。

第４話　惑星アグライアとは（前書き）

４話目です。ようやく慣れてきました。

第４話　惑星アグライアとは

「まずはこの星、アグライアの説明から始めるわね？」

無言でコクリと頷く俺。

「アグライアはあなたたちが住んでいる地球から大体…１４光年離れた場所にある惑星なの。岩石で出来ているから、地球とあまり変わりは無いと思っていいわ。」

「へえ…ってあれ？１４光年って割と近くないですか！？」

こっちから見つからないのは不自然な気がする。

「それは…確か、地球との間のどこかに…暗黒物質？とかそういう感じの物質が集まってるところがあるとかで、丁度どちらからも見えないようになってるらしいわ。私はそんなに知識無いから…簡単にしか説明できないけどね。」

「なるほど…そういうことなんですか…ご都合主義な…。」

「え？」

「なんでもないっす。続けて下さい。」

話を進めてもらう。

「自転周期は２４時間、公転周期は３６６日。えっと…直径は地球より少し小さかったはず。」

「これまたご都合主義。」

「ご都合主義でも無いのよ。きちんとした理由はあるから」

小声のつもりだったんだけど。聞かれてた。

「あ、暦は地球に合わせてるから、１２月３２日まであるんだけど」

「別で調整しろよっ！？」

「で、次ね。この星はひとつの大陸しかなくて、陸と海の割合は大体１：９くらい。それゆえに、戦争は一度も起こったことが無いのよ。まあ…犯罪は起きるけどね」

「海は広いな大きいな…ってレベルじゃないっすね…」

「星自体のことはこのくらいでいいわね？次、学校について。」

「ああ、気になってたところなんですよ。」

いきなり大学に入れとか言われたしな。

「この星では、小学校、中学校ときて、次は大学校なの。」

…え？それって…

「大学は高校と同じようなものってことですか！？」

「まあ…そんな所ね。あなたと同じくらいの年の子が通ってるから。

」

なんだ。そんな身構えることとなかった。

「大学には一般大学と技巧特化大学があるわ。一般大学の方はそちらの高校と変わりはない」

「で、技巧特化大学はこっちでいう工業高校とか商業高校みたいなもの、ですか？」

先読みして言ってみる。

「まあそんな感じよ～ただ、大きく違うところがある。」

「？何が違うんですか？」

「例えばあなたみたいに数学と物理が得意なら、それ以外の教科は無いのよ。」

驚きで口が開く。

「なん……だと……！？」

「ドドドドドドドドドドド」

「口でその効果音出すのやめてくださいごめんなさい俺が悪かったです」

ふぅ……ヒヤヒヤするぜ…。

「すごいですね…まさに技巧特化って感じですね。」

「でしょう？　本当にすごいんだから！」

えっへん、と胸を張る。

「いや、ミネルバさんが威張ることじゃ無いと思います」

そう言い終わったとき、玄関がガチャ、と開いた。

「ただいまーっ！！……って誰…！？」

小学生っぽい女の子が家に入ってきた。

第４話　惑星アグライアとは（後書き）

この少女の正体はいかに…！？
って、普通に娘ですけど。

第５話　幼Ｊ…家族との出会い（前書き）

５話目です。節々にネタを入れてます。

第5話　幼j…家族との出会い

ミネルバさんから俺の事を聞いた猫耳で茶髪、ポニーテールの幼…少女が話し始める。

「そう…。姉さんが…。悪いことしたわね。ごめんなさい。」ぺこりと頭を下げてくる。

「ちょ、頭上げてくれ…。こっちが申し訳なくなる」慌てて顔を上げてもらう。

「あ、挨拶が遅れたね。私はケレス・クロト。この家の次女。これからよろしくね？」

少女が微笑む。

「俺は三谷継、１７歳だ。こちらこそよろしくな」

俺も挨拶する。

その様子を見ていたミネルバさんがケレスに話しかけた。

「ケレス、あなたもちゃんと歳を言いなさい？」

なんか心なしかニヤニヤしている。

「あの……歳聞いて…《コポォｗｗｗ》とか《フォヌカポウｗｗｗ》とか言わない…でね？」

「なんだそれ？言わねーよ」

なんなんだろう…？

「う…………じゅ……歳……」

「え？」

10歳？

言いよどんだケレスが再び口を開く。

「……もうすぐ…16歳。」

「…………ゑ？」

どうみても12歳くらいの幼女なんだけど

童顔、低身長、ツルペタ。

これを幼女と言わずになんと言「ぐっふぁあ!?」

腹を殴られた。

「哀れむような目で見るんじゃないわよ！！どうせ発育不十分でツルペタよ！！悪かったわね！！」

ケレスちゃん涙目。

「痛え…言ってねえよんなこと。ていうか、そういう嗜好の奴にはウケが良いんじゃないのか？」

と、言ってみる。

「ああ…。それが厄介なんだけどね…。」

「え？どういう意味？」

「……なんでもない。じゃね。」

そういうと、ささっと階段を上がっていく。

「ふふふ」笑うミネルバさん。

「ミネルバさん…楽しまないで。」

はあ。疲れた…。

「あ、そうだ。家の中案内しないとね。建物探訪」

「いや〜いい家ですねぇ。このアンティークの家具、木のぬくもりを感じますね〜。…ってなにやらせるんですか！？」

思わずノリツッコミしてしまった。

「あら〜ボケも割といけるわねぇ。似てたわよ？」

「…話を元に戻しましょう。」

はあ…。

「そうね。じゃあついてきて？」

ミネルバさんが歩き出す。

「そっちが居間でこっちがトイレ。で、そこがキッチンでここはお風呂。……ケレスが入ってても覗いちゃダメよ〜？」

にやにやすんな…。

「大丈夫です。俺ロリコンじゃないんで。」

「あらそう。…残念。」

残念…じゃねえよ！！心中で悪態をつく。

「庭にある離れは工場。お父さん…あ、旦那ね、鍛冶職人やってるのよ。なかなか腕はいいわよ？」

へえ、と声を漏らす。ガタイのいい渋面のおじさんを想像してしまう。

じゃ、2階ね、といってミネルバさんが階段を上がっていく。

「ええと…この階は物置みたいな部屋が多いわね。絵を置いたり、お父さんの作った物を一時保管したり。」

ん？

「絵…ですか？」

疑問に思ったので言ってみる。

「そう。私画家だから。これでも結構名は知れてるのよ〜？」

「なんか…意外な感じがします」

「そう？あ、ちなみに4階は私の仕事場だから。」

4階丸ごとか、と聞くとそうよ、と返ってくる。外から見てもかなり広かった気がするが。

「さて、案内再開しましょう。そこが長女の部屋。下着くらいなら盗ってくんかくんかしても構わ「しません」

言い終わる前に言葉を被せる。
「あ、その隣空き部屋だから今日から三谷くんの部屋ね〜。」
「あ、はい。ありがとうございます。」
サラッと部屋を決められる。
「じゃ、3階ね。」

階段を上がり、ミネルバさんが再び話し始める。
「この階は私とお父さんの部屋、物置、ケレスの部屋があります。」
指を差しながら歩いていく。

ケレスの部屋の前で小声で話しかけてきた。
「ケレス、今着替えてるかもしれないから突入しましょうか？」
「はぁ！？あっ、ちょ」
「どーーーーん！！！！！！！」
ミネルバさんが勢いよくドアを開ける。咄嗟に目をつぶった。
「ひぇっ！！？」

ケレスのビックリした声がする。

俺は紳士だ…絶対に目は開けんぞ…！！！

そんな俺と裏腹にミネルバさんは
「なあんだ。もう着替え終わってたか、残念。」と落胆の声を洩らす。

目を開けるとさっきとは違う装いのケレスがいた。

「も、もう母さん！！あと１０秒早かったらヤバかったわよ！？」
と、ケレスが叫ぶ。

…危なかった…また殴られるところだった。

「今建物探訪中なのよ〜……あら、脱ぎたての服が落ちてるじゃない。三谷くん、くんかくんかしてもい「キャアァァッ！？」

ケレスが服に飛びつく。

「継ってまさか…そういう性…癖…なの…！？」

ケレスが「信じられない」というような目で見てくる。

「はあ……。違う。ミネルバさんがふざけて言ってるだけだよ。」

溜め息混じりに言った。

「ああ…なんだ…よかった…。」

ケレスは心底ほっとした様子だった。

その後俺はミネルバさんの旦那さん、バルさんに会いに工場に行った。

バルさんは…想像した通りのガタイのいい渋面のおじさんだった。

バルさんさんは俺が挨拶すると

「…そうか。息子が出来たつもりで接する。よろしく」

これまた渋い声で言った。

俺はその後、バルさんに手伝ってもらい、ベッドと机、椅子なんかを部屋に運び込んだ。

ベッドは存外、フカフカしていた。横になってぼうっとしていたら、いつの間にか眠っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3872ba/

理系の人々

2012年1月11日20時55分発行